



福祉ネット「ナナの家」会報

「あい」の訪問看護レポート:会報 33号 (2007年7月発行)



ナナの家グループにヘルパーステーション「あい」が誕生してから一年後のH18年10月、訪問看護ステーションが併設された。重度の障がいや医療ケアに看護師が対応することで、より多くの人達に質の高い個別支援が可能になると考えてのことだそうだ。現在6人の看護師さんたちがローテーションを組んで、患者さんご家族をお訪ねしている。

今回は、訪問看護ステーション「あい」の看護コーディネーター倉内暢子さんにお話を伺った。
(レポーター: 柘植有子)

倉内暢子さん

看護師

訪問看護ステーション「あい」看護コーディネーター

<看護師さんの仕事>

看護師さんの仕事は法律的には“医師の指示の元で、全てを行う”ことに尽きるそうだ。医師が診察・治療をする際の介助はもちろん、病気・病弱・妊婦・怪我人などの療養の世話や、時には自宅療養する際の相談にも乗る。手術前後の患者さんを見守り元気付けたりするのもお仕事。『つまり、元気に成る為の手助けてことかな・・・』と倉内さんは明るくおっしゃる。

あくまでも“医師の指示の元で・・・”ではあるが、時には医師にアドバイスすることも有るそうだ。例えば外科手術を受けた患者が熱を出して中々下がらない場合、熱の原因は何かを観察しながら探る。痛みによるものなのか？傷口に細菌がついたのか？手術のストレスによるものか？それとも風邪？内科的な発熱？と。つまり全体的に人間を見て、異常と正常の判断をし、担当医に報告して最良の処置を施すのだ。

看護師の仕事の場は多岐にわたり、特に近年需要が増えているのが「訪問看護ステーション」だ。

<「あい」の訪問看護>

小児病院出身の倉内さんは、今までに多くの、障がいや難病を抱えた子どもとその保護者(主にお母さん)に出会ってきた。そして常々思っていたのが、親は子離れ子は親離れして、社会との関わりをもっと深めて欲しいということだ。

そして去年、以前から知りあいただった皆河さんから“本人のケアと同時に家族のレスパイト(休息)も視野に入れた訪問看護ステーションを立ち上げるので協力して欲しい”という話を聞いて共感し、参加することに決めたのだそうだ。

「あい」のキャッチコピーは from children. つま

り子どもの時から見る訪問看護で、「ナナの家」に通う子どもたちのニーズに応えることから始まった。狛江付近には小児医療を中心とする国立成育医療センターと光明養護学校があることから、難病患者が多く集まり、子どもから見る訪問看護ステーションの必要性がとても高くなってきている。しかし、子どもを対象とした訪問看護ステーションは数少なく、世田谷や狛江在住者は新宿のステーションに依頼しているのが現状だそうだ。

「ナナの家」の子どもたちの中にも酸素を使っているからと、スクールバスにも乗れず、授業中も保護者が待機し、それぞれ24時間親子一緒のケースがある。数少ない難病を持っているからと、年頃になってもどの施設からも宿泊を拒まれているというケースもある。『いろんな実情を聞いて、私もお母さんからお子さんを預かれるナースを目指すことにしたの。』と倉内さん。

“看護”という字を分解すると、“看(み)て護(まも)る”となる。“看”という字は“手をあてる”や“手当てする”という意味も持つ。親が子どもの具合の悪いところを探すために身体のあちこちに手をあてたり、さすってやったりすることに通じる。つまり、看護とは母の心から発したものと言えるようだ。

お母さんにレスパイトしてもらうためには、看護師がどこまでお母さんの代わりが出来るかということになる。障がいのある子を預かるとなると、泣けない子もいるし、話せない子もいる。そんな子ども達に接していると、お母さんの足元にも及ばないと思うこともよくあるそうだ。『こんな時にはこうしても大丈夫!という見通しが立たないと預かれないし、逆にそのレベルまで力が無いと、お母さんもお子さんを委ねてくれない。私たちが育たないと、「あい」のレスパイトの目的は、絵に描いた餅に過ぎなくなってしまおうでしょう』

お母さんの代わりが出来るようになるためには、どうしたら良いのだろうか?まずお母さんの話を良く聞く。そし

てお母さんの経験から得た判断に耳を傾ける。その上で看護師は専門的裏付けをもって、対処するのだ。お母さんの障がいへの理解度を判断する事も大切な仕事。そして毎月開かれる看護師の定例会に報告し、仲間との情報交換を通してより良い対処法を探したりもしているそうだ。

倉内さんはいつも保護者に『お母さんにはお母さんにしか出来ないことがあるので、お母さんでなくとも出来ることは私達にやらせて！』と言ってきた。患者に接するのは看護師だけでなくヘルパーもいるが、ヘルパーにはやってはいけないとされることが沢山ある。それに対して看護師にはその制限がない。だから、誰がどんな風にケアすべきか、サポートすべきかを考える。つまり、一人の患者さんに関わっている人達がチームを組んで協力できるようにするのも、コーディネーターの大切な仕事になる。

訪問看護は通常、週3回許可される。1回の訪問時間は30分から90分が目安となっているそうだ。しかし「あい」では、看護師が看護と介護（ヘルパー）をすることで、1回3時間の訪問時間を基本とし、お母さんにレスパイト（休息）してもらいたいと考えた。これは訪問看護の草分けである、横浜の“萌”を参考にしたのだそうだ。

さて、利用者さんのお宅を訪問した看護師はどんな事をするのだろうか？

どういう状態のお子さんに対しても、共通して行うのはバイタルチェック（血圧・体温・呼吸・脈拍測定など、健康状態の観察）。その後、ケースバイケースで様々なサービスを施すそうだが、具体的にどんな事なのか、「あい」の看護師さんたちが作成したパンフレットから抜粋してみよう。

① 医療処置～全身の状態と病状の観察、医師の指示による医療処置やカテーテルの管理、吸入の処置、酸素療法、人工呼吸等の医療処置。床ずれ予防と処置。内服指導など。

② 日常生活の支援～入浴介助・洗髪など、体の清潔保持や排泄の介助。食事療法（経管栄養の指導他）や栄養に関する相談と指導。

③ リハビリ～体位交換・優しい運動・よい姿勢の保持・呼吸のリハビリなど。

④ 家族支援～家族への療養上の指導・相談。家族の健康管理など。

⑤ その他～介護の方法や介護用品についての指導など、生きがいのある生活づくりへの相談や助言。

看護師がお子さんと一緒にいる間のお母さんの様子も聞いてみた。ある方は溜まったお仕事をこなし、ある方は図書館で調べもの。買い物・家で読書・室内の整理整頓・あるいは看護師とおしゃべりなど、色々な時間の使い方をなさっているという。「あい」の目的の一つである“家族のレスパイト（休息）”に少しずつ近づいているようだ。

最後に倉内さんからのメッセージをお伝えして報告を終わる。

『難病や障害を持っている子どもの場合は、いつも傍にいる保護者、特にお母さんがその子に関することではエキスパートだと思う。でも、私達に手伝えることも沢山あるので、訪問看護を利用しようかどうか迷った時には、気楽に相談して欲しい！それから、私達（「あい」）の主旨に共感してくれる沢山の仲間が集まってくれと嬉しいですね。』